

民族舞踊文化



No.31 令和元年(2019)5月9日
THE MAYUZUMI FOUNDATION FOR TRADITIONAL FOLK DANCE
一般財団法人 黛民族舞踊文化財団
〒107-0052 東京都港区赤坂 3-10-3 黛ビル 4F TEL 03-3583-3633
<http://www.mayuzumi.or.jp> FAX 03-3583-3639



黛 節子生誕100年記念号

ごあいさつ

一般財団法人 黛民族舞踊文化財団
理事長 加戸守行

いよいよ平成の御代に別れを告げ、新しい御代を迎えることとなりました。

当財団では、昨年十二月に、創設者黛 節子の生誕 100 年を記念して、生け花とのコラボという斬新な企画で「火を祀り 水に祈る」の平成最後となる自主公演を開催いたしました。手前味噌ながら、大好評で素晴らしい成果を上げたと思いました。

当財団運営のネックとなり頭を痛めておりました一階テナントの転貸・再転貸によるトラブルも解決し、この三月末から新テナント「魚金」のオープンにより正常な軌道に復帰できたことを喜ばしく存じます。

私事ながら、私は本年三月に平成の御代最後と思われる宮中茶会にお招きを受け、皇居春秋の間で宮中舞楽を鑑賞させていただく光栄に浴しました。一つが中国系の舞「萬歳楽」で、もう一つが朝鮮系の舞「延喜楽」でしたが、これも我が国の誇る民族芸術だなという思いを抱くとともに、創設者が力を入れて来られたはずなのに、ここ数年財政難で途絶えている中国雲南省の民族舞踊団との交流を再開しなければとの思いを強くいたしました。

皆様の御理解・御協力を念じ上げます。



フル回転の女王、黛 節子さん、
きっとあなたは今も踊ってますよね

龍 居 竹之介 舞踊評論家
(公社)日本舞踊協会顧問

黛 節子さん、ごぶさたしています。こうご挨拶をしながらも、固い信念を貫き通した強いあなたの姿や、心根の優しいあなたの面影が走馬灯のように頭をよぎっています。

戦後の赤坂の真っ暗な景色の中に立つあなた、稽古でも本番の舞台でもトコトンまで納得がいくまで考え続けてやまない芸の虫のあなた、そして亡くなった大野 晃さんも交えて他愛ない話をしながら「ねえ、お腹減ってない」とやさしく気づかっても下さるあなた、明るくなった赤坂の町並みの中に誕生させたユニークな黛ビルを背に意欲満々という表情のあなた、そのアートサロンでの新年のつどいで手際よく来客を楽しませるあなた。思えばさまざまあなたの表情に私は人の生き方を学んできたことでした。

こうして振り返ると、昭和三十年代初頭、初めてお目にかかったころから、本拠ビルでの活動開始ころまでの素顔のあなたばかりが、特に強く浮かび出しますから奇妙です。

当時、日刊スポーツ新聞社の文化部で演劇担当記者であった私は、藤間節子から黛 節子に変身して日本独自の民族舞踊の普及確立に邁進し出したあなたの信念の強さにひかれていました。そこでなんとか紙面であなたの魅力を伝えようと思ったのですが、なかなか部長に許可されませんでした。そんなとき文化部長が交代しました。芸能とはまったく無関係な早稲田大学山岳部の現職監督という自他ともに厳しい生粋の登山家です。

その新部長に一日「文化部の守備範囲ですから踊りも見てください」と、あなたの舞台に誘いました。「原体剣舞連」と「荒絹」だったと思います。しかし部長は着席するなり熟睡で私は「オヤオヤ」。でも翌朝、部長がいきなりいったのは「昨日の踊りの小母ちゃんは意気がいいし、チャーミングだったな。とても楽しかったよ！」で大満足の態でした。

そこから話が広がり、何回か連載の随想をあなたにお願いすることになったのでした。タイトルは脇にいた映画担当記者がつぶやいた「おどりおどろき(記)」が面白からうということにあいなり、私はさっそく赤坂にお願いに行きましたね。話は受けて頂きホッとしましたが、それよりも「私、部長さんと気が合いそうね。よろしく伝えて」とあなたから嬉しそうにいわれたのが印象的でした。実はこの部長は大正八年だったかの生まれで、七年生まれのあなたとは同世代でしたから気があったのかも。

ですが私がそのとき即座に思ったのは、「黛 節子という舞踊家は、どんな相手にでも踊りの楽しさ、魅力を素直に体感させられる人なんだな。だから世界に目を向けて活動されてもおかしくないな」ということだったんです。

さて最後にあなたへのお詫びです。この原稿を財団の田中英機常務理事から依頼されたのを機に、「おどりおどろき(記)」をスクラップから探したのですが、とうとう見つからず時間切れとなり、皆様にあなたの豊かな文才の一端をご紹介できなくてご免なさい。いずれなんとか見つけて投稿させて頂きたいと考えています。

そういえば当時、赤坂の和室に伺ったとき何か書き物をしていたあなたが筆を止めて振り向いたその姿が、まるでベテランの女流作家よろしくの感じでしたね。

しかし幽明相隔つといえども、民族舞踊命でフル回転のあなたのこと、生誕百年を迎えられたという今このときも、きっと踊っていらっしゃるんでしょうね。黛 節子さん！



黛 節子の思い出

沢田 祐二

照明家
(公社)日本照明家協会名誉顧問

先生は1956年、創作舞踊と民俗芸能に専念するため「黛 節子舞踊団」を結成しました。それまで日本舞踊家「藤間流名取・藤間節子」が、なぜ「藤間節子」から「黛 節子」へと変容したのか。僭越ですが私が想像するに日本舞踊を踊っているなかで又作品創りのなかで、舞踊家として心の動き、体の動き、感じ方に、心に満たされない何かが湧きでてきたのかも知れません。その頃の日本は戦後の激動期を生き抜き、人々は重苦しい空気から解放され、舞台芸術の世界でも情熱あふれる優れた芸術家たちが現れ、それぞれのジャンルで先頭に立って集団を牽引し、あらたな挑戦に挑んだ活気ある頃でした、こうした時代の流れも先生の後押しになったかも知れません。先生は1967年舞踊団の活動を確かなものとするため「黛ビル」が建設されて念願のサロンを設け、1968年に「第1回 黛アート・サロンの夕」が開かれました。

私はこのとき大野 晃さん〔後の(財)黛民族舞踊文化財団常務理事。2011年没〕に新しい公演を立ち上げるので手伝って呉れないかと誘われ参加しました。大野さんは私が日生劇場で働いていたときの同僚です。彼は先生のそれこそ両腕、両足であり舞踊団のすべてを任されていた。先生の演出助手であり、ある時は演出家でもあり、音楽、装置、小道具、衣装などのコーディネーター、舞台監督、プロデューサー、そのうえ舞踊団のあらゆる雑用をすべて取り仕切り、稽古に入れば先生の手足になって舞台づくりに奔走し、何かあれば彼が怒られると言う役回り。でも彼は先生の気持ちをしっかりつかみ、又先生も彼に絶大なる信頼を寄せて居たところに舞踊団が強い絆で結ばれ、先生が作品創りに没頭できる環境が作りあげられたと思います。

先生の傑出した美意識に裏打ちされた舞台造りは素晴らしいものでした。民俗舞踊が持つ土着性、地域性、独自性を生かしたなかでの舞台表現は、背景の隅々まで、持ち道具に至るまで優美さ、華麗さ、沈着さ、上品さが求められ、特に衣装に対する感性の鋭さは見事でした。「沢田ちゃん綺麗な光り当ててね」と良く言われました。先生の踊りはスケールが大きくダイナミックでそれでいて、余計なことは排除され非常にシンプルで美しかった。日本舞踊で鍛え上げられた体の動きから、そしてその一手一手から「テクニック」ではない、踊り手の生き様が、描かれる人々の生き様が、その住む世界が浮かび上がってきます。その体の線がその人の人生であり、そこから踊られている世界が美しく幻想的に浮かび上がってきます。心の底から湧き上がる深い踊りへの愛がそうさせるのでしょう。

民族舞踊の魅力、地域の民俗芸能を舞台芸術の域まで高め国内外に日本の文化として広めた功績はすばらしいと思います。これから舞踊団として娯楽と文化と伝承の多様性に向き合い、どう時代と共に生きていくのか。舞踊団の健闘をお祈りします。



民族舞踊の過現未

丸茂 祐佳 日本大学教授
舞踊評論家

「黛 節子生誕100年記念号」という記念すべきテーマのご依頼を受けた私は、日本各地の民俗舞踊や日本の民族の精神や表現を素材に舞台芸術として創り出してきた黛先生の軌跡をたどってみたい。なお、過去の対象には、黛先生と同じように日本舞踊の基礎を叩き込まれた舞踊家たちの活動を取り上げた。

まず、戦前・戦中の活動として想起されるのは、初代西崎 緑の若葉会と花柳徳兵衛舞踊団である。彼らは各地の慰問公演を基に、戦後、舞踊団を結成して活動した。それは私の生まれる前の活動であり、私は若い頃に読んだ二世花柳壽楽の好著『日本舞踊』（鹿島出版会、昭和45年2月）から学んだ。初代緑は日本舞踊の将来につながる新しい生き方を模索し、舞踊団を組織して全国を巡演、大衆に踊りを普及した。いっぽうの徳兵衛は、昭和28年発表の「慟哭」のほか「鶴ふたたび」「土に生きる」の群舞三部作や「壇ノ浦」など歴史や風土に根差した作品で大衆を感動させた。

この間、昭和24年、当時藤間節子を名乗っていた黛先生は帝国劇場での第1回リサイタルを皮切りに創作舞踊と民俗芸能の研究発表に専念する。3年後の第2回リサイタルでは「赤いローソクと人魚」「ヒエツキ唄」他を上演し、芸術祭文部大臣奨励賞を受賞。また、能・地唄舞・舞楽・御冠船踊を修得し、民俗芸能の現地取材と研究を基にした新しい日本民族舞踊の確立を目指して黛姓に改名して黛 節子舞踊団を設立したのが昭和31年（『民族舞踊文化』No.9参照）。因みに、それより後発したのが、初代尾上菊乃里が畑 道代の本名で昭和47年に設立した舞踊集団菊の会である。統制された群舞の動きと「カッチャいかねかこの道を」（三隅 治雄作）など舞踊劇に特色がみられる。

さて、私が今でも忘れられないのは、黛先生が古典舞踊家から民族舞踊家へと転身されたその動機である。それは確か、民俗芸能には魂をゆさぶるものがある、という情熱からだった。黛先生はその情熱的な性格と活動が目目されてきたが、私が黛先生にお近づきさせて戴いたのは、当時、小笠原恭子先生と一緒に女歌舞伎の面影を残す奈良県の篠原踊りを研究されているということ立教大学大学院生であった従姉から教えてもらったのがきっかけだった。それらは阿国歌舞伎時代の踊りの復元を試みた「小原木踊り」「しのはら踊り」として有名である。

黛先生には先人を超える行動力を伴った研究姿勢があり、そこから芸術性豊かな作品を生んだという偉大なる功績があると私は信じている。その研究姿勢は晩年の日中韓の舞踊交流と芸態の比較研究にもつながっていく。民族舞踊には、国や言葉の壁を超えて世界の人々の魂をゆさぶる何かがある。これからは、日本の民族舞踊も大いに世界に羽ばたいてもらいたい。そのためには実践研究に基づいた眼識と鍛え抜かれた身体と動きが大事になることだろう。黛先生がそれを成し遂げられた陰には、見識ある芸術観をもった故・大野 晃常務理事と、黛先生と舞踊団運営に献身的に取り組んだ黛 莉香 前事務局長の長年の支えがあったことを本稿の末尾に添えて、私は筆を擱こう。

黛 節子生誕100年記念



黛 節子プロフィール

本名: 武田 きみ (芸名: 藤間節子、黛 節子)
 生没: 大正7年2月11日生・平成7年10月16日没
 出身: 東京都 女子学院 (昭和10年卒)
 所属: (賤) 黛民族舞踊文化財団理事長 (初代)
 黛アート・サロン主宰
 黛民族舞踊団団長
 日本民俗芸能協会理事
 顕彰: 昭和27年度芸術祭文部大臣奨励賞
 平成3年11月勲四等瑞宝章

芸歴

昭和21年 初代花柳寿美に入門、後に藤間勘斎より名取名藤間節子を許される。
 昭和24年 藤間節子リサイタル (智恵子抄、帝劇)
 昭和27年 第2回藤間節子リサイタル (赤いローソクと人形、帝劇)
 昭和29年 日本民族舞踊集 (第1集、東横ホール)
 昭和31年 日本民族舞踊集 (第2集、東横ホール)
 黛 節子を名乗り、黛 節子舞踊団結成
 昭和42年 黛ビル竣工、黛アート・サロン開場
 (以上「民族舞踊文化」No.9参照)

黛 節子 (日本民族舞踊家) 旧居 荻窪の地に生誕100年を記念し碑を建立 (平成30年7月7日)。
 「櫻とこの地をこよなく愛した師を思う 黛民族舞踊団」と刻す (右側面)。

機関紙「民族舞踊文化」No.9 (1996.10 発行) 追悼特集号より 黛 節子の面影を偲ぶ

黛 節子さんの思い出 (抄録)

早稲田大学名誉教授 郡司 正勝

大輪の南国の華が、いっぱい開いたままで、一夜にして落ちてしまったような、鮮烈な印象を残して、黛 節子さんは亡くなってしまった。黛さんの鮮烈な印象は、民俗芸能の採訪の旅先のことで、忘れられない情熱を傾け尽くされている姿だった。

今は絶えてしまった12年に一度行われる沖縄の久高島の最後のイザイホウでお出合いしたお姿が忘れられない。南国のつよい日差しを浴びて、神になるナンチュたちの儀式と踊りを、地上にどっかと腰を下ろして、5日間、その人々のとり巻く輪の中で、身じろぎもしないで、ナンチュたちと同じように天にも昇るように輝いていた。あの燃えるようなハイビスカスのような黛さんの魂の輝きを。昭和53年の久高島の祭りの日を。

イザイホーの夜 (抄録)

日本写真家協会名誉会員 芳賀 日出男

昭和53年(1978)は^{うま}午年、この年の12月14日から沖縄県の久高島でイザイホーの祭りがおこなわれた。島に民宿することになり、訪ねてみれば、そこは民家の網小屋、^{とまや}苦屋である。寝袋持参の意味がよくわかる。小屋のうす暗い奥の方をうかがうと先客がいた。目のパッチリした黛 節子さんだった。これから5日間を、この小屋でどこ寝の共同生活をすることになるのだ。

イザイホー3日目「朱つけ遊び」が無事に終わった日の午後、黛さんが大鍋を借りてこれ、今夜は大宴会をしようという。豚肉と味噌は雑貨屋で買った。野菜は畑に買出しに行くと、持主が祭りの期間中は体がケガレルので農作業は禁止だが、欲しければ勝手に大根でも人参でも抜いて持って行って、という。庭にカマドもこしらえた。浜辺の流木を薪にして煮はじめ。

黛さんはお料理の味付けが上手で、トン汁はとてもおいしくできあがった。わが苦屋からは久高島の夕べの風のものいい匂いが四方八方に流れていく。島の泡盛も充分、琉球大学の大城先生が三味線をひき、島唄がわれらの心をゆさぶる。人生の幸福とは、こんな一夜のことをいうのであろうか。

黛さんは三味線のメロディによって、坐ったまま腰をうかせて、琉球舞踊をはじめられた。そして最後に「夕神遊び」で聞いたばかりのナンチュたちの掛け声「エーファイ、エーファイ」を叫んだ。その気魄に、私は一瞬黛さんの才能に煌めきを感じた。

12年後の平成2年午年のイザイホーは実現しなかった。最後になったイザイホーの夜の黛節子さんも今や星となられてしまった。思い出は深い。



左端が黛節子。順に芳賀夫人、鷲尾星児、後藤淑、本田安次、原浩一の各氏。
 芳賀日出男=写真提供

平成30年 12月8・9日 自主公演 コラボデ黛in黛スタジオvol.4

黛 節子生誕百年記念

火を祀り 水に祈る 生け花とのコラボレーション

会 場 黛アート・サロン

ゲスト

華 道 家 田中 鈴峰 草月流師範会理事

和楽器奏者 高倉 龍和

企画・演出 平出 圭 (黛 圭)

構成・振付 黛 琉美

出 演 黛民族舞踊団

黛 真也 黛 李穂 黛 圭

伊藤 みつ子 花柳 翁麗 五月女 華舟

小山 羊子 武田 静子 キャサリン・チェン

花岡 明美

スタッフ

照 明 小保内 陽子 (株)エクサート松崎

舞台監督 堀井 基宏

衣 裳 的場 花枝

撮 影 田中 文太郎



生花 手前「水」・奥「火」

田中鈴峰 作

いのちの指標

黛 圭

「舞踊は祈りである」という節子先生の言葉は、私たち黛の者が舞台に立つとき、また、稽古指導をするときの核になる、大事なライフ・インデキス(生命の指標)です。生きいきと血が脈打つような祈りの踊りを求めて、今回のコラボは「火(か)」と「水(み)」、まさに神を祀り、神に祈る舞台を創りました。

〈水〉パートでは、清らかな流れに亡き人への思いを託す姿、水辺で命を紡ぐ鳥、たゆとう恋慕、清らかな乙女の舞、蜻蛉(精霊)の棲む湖の静謐をイメージしました。そして〈火〉では、燃え尽きた古木を吊い新しい命を育む自然の力、潑刺とした命の謳歌、雄々しく力漲る火の国の踊り、廻り続ける生命の再生を表現したいと思いました。

今回は、節子先生の指導を受けた経験をお持ちの華道家、田中 鈴峰先生に文字通り花を添えていただき、高倉 龍和氏の和楽器のお力も借りての舞台です。物言わぬ花の言葉を聴き、打楽器の奏でる静寂のなかに、祈りの舞台を一同で務めあげました。

【水】

一、灯ろうながし

亡き人の魂を螢に見て、川辺でしのびます。夏の夜、川に浮かび上がる灯りたちの幻想的な美しい景色です。



二、命をつなぐ～巣立ちの時～

「穏やかな流れのある森の中一雛の成長と巣立ち、命を繋ぎそて消えてゆく親鳥」を踊りにしてみました。



三、越中おわら

越中八尾地方で風の盆と呼ばれ町をあげて踊られる盆踊りです。

黛節子はこの盆踊りを基に男女の出会い・別れ、その日本情緒を惜しみなく表現して、一つの立派な日本の民族の踊りにつくり上げました。



四、水辺の舞人

雅楽・右舞の手法を基に越天楽を舞踊化したものです。日本の四季折々に咲く花を手に舞う舞人の姿は日本の美のひとつと言えます。





華道家 田中 鈴峰



和楽器奏者 高倉 龍和

五、水をどる

清水に子孫を託す蜻蛉、水に生まれやがては空を飛翔するその生命に神秘的なものを感じ、創作した作品です。



【火】

六、歩き巫女

各地をまわって祈禱・占い・口寄せなどを行う巫女。今回は、古木の命を弔い再生を願う祈りの舞いです。



七、豊年舞

土に生きた祖先は豊かな稔りこそこの上ない喜びでした。雨も風もことなく過ぎ、秋の稔りを感謝する踊りです。



八、いのち うたう

燃えあがる命の謳歌。生を楽しむ、澆刺とした娘たちの踊りを、綾竹を使った振りど、太鼓との掛け合いでご覧いただきます。



九、棒踊り

鹿児島島の指宿に伝わる踊りです。農民が自らを護るために身につけた棒術を舞踊化した、勇壮な踊りです。



十、木霊(こだま)

天と地に祈りを捧げ燃える命を紡ぎ続けるのは、人間か木霊か。生きている私たちの使命、それは、豊かな自然を愛し、畏れ、命を限りに精一杯生きること。一節子先生に捧ぐ



平成30年度 参加公演記録

5月4日(金)～6日(日) Yプロジェクトプロデュース公演 NOH! BASARA「平安絵巻」
3本立て公演「班女・隅田川・義経地獄破り」 会場：渋谷区総合文化センター大和田伝承ホール



義経地獄破りより 原体剣舞連の披露



義経地獄破りより 鬼役となり義経軍との立回り

6月23日(土) 新宿芸術家協会主催公演 The Dance Gathering vol.22「彩なす色を踊る」
会場：四谷区民ホール



のんのこ節



長崎ぶらぶら節

11月4日(日) 草加ふささら祭り
会場：ワールドバザール会場(草加市文化会館前)



南部俵積み唄

12月2日(日)・5日(水) プッチーニのプロフィール プレゼンツ オペラ「蝶々夫人」
会場：12月2日浜松学芸中学校・高等学校 中村記念館ホール・5日セッション杉並ホール



浜松公演 2幕間奏曲場面



浜松公演 2幕間奏曲場面



浜松公演 カーテンコール



浜松公演 ロビーにて記念写真

令和元年度 黛民族舞踊団公演予定 (令和元年5月現在)

【自主公演】

12月7日(土)・8日(日)「コラボデ黛 in 黛スタジオ vol.5」 開催予定

詳細：企画検討中

舞踊団員募集のお知らせ

現在 15 名の舞踊団員で活動を行っております。

このたび、黛民族舞踊の継承と発展をはかるため新団員を募集します。日本の伝統舞踊の創造に興味と関心のあるお方は、まずは稽古見学・体験レッスンから参加してみてください。稽古を重ね、技を磨き、仲間と共に舞台へ立ってみませんか。応募お待ちしております。

詳しくは、当事務局までお問い合わせ下さい。

稽古場：黛アート・サロン(地下鉄 赤坂見附駅 徒歩 2 分)

稽古日時：毎週月曜日 18:30 から 21:00

お問合せ先：黛民族舞踊文化財団事務局

TEL 03-3583-3633 / FAX 03-3583-3639

E-mail info@mayuzumi.or.jp

home page





平成30年12月9日 コラボ自主公演終演後の記念写真

一般財団法人 黛民族舞踊文化財団のあらまし

当財団は、わが国伝統の民族舞踊を舞台芸術として確立し、その普及向上を図るとともに国際文化交流を行うことを目的として、昭和61年3月文部大臣から設立を許可された団体です。

財団設立後は、(1)民族舞踊普及向上のための中央における公演をはじめ、地方巡回公演を活発に行ってひろく一般にこれを紹介し、また研究成果の発表会等を開催し、(2)後継者の育成を目的として民族舞踊の研究者(音楽、振付けを含む)、舞踊家のための研究会、研修会等を開催して創作活動を奨励すると共に技能の向上を図り、(3)日本各地および東南アジア諸国の民俗芸能を取材し、その研究を行うと同時に収集した資料を整理保存して一般にこれを提供し(将来は資料館を設置して一般の利用に供することを計画しています)また、(4)世界各国にはそれぞれ民族舞踊団が国家の庇護のもとに活動していますが、これらの舞踊団との交流や、東南アジア諸国の民俗芸能伝承者たちとの交流等、幅広い国際交流を推進して相互の連携と研鑽につとめ、(5)民族舞踊、民族芸能に関する資料および研究成果等の出版物を刊行して、民族舞踊に対する理解を深める目的達成のため、年次を追って事業を充実していきたいと考えております。

しかしながら、事業を発展充実させていくためには、何と申しましても経済的基盤を確立する必要があることを痛感いたしております。当財団が、真にわが国を代表する民族舞踊の振興団体として育ってまいりますよう、財団の事業目的を御理解くださり、各界の方々の御支援を心からお願い申し上げます次第です。

つきましては、当財団には下記の通り賛助会員規程を設けておりますので、皆様にはぜひ賛助会員として、会費により御支援を賜りたく、お願い申し上げます次第です。

黛民族舞踊文化財団賛助会員規程

一、 賛助会員とは、この法人の趣旨的に賛同して入会くださった個人・法人(団体)の方々の名称です。

二、 会費寄付の内容は下記の通りです(但し、年間会費として扱わせていただきます。)

- | | | |
|----------|------------|-------|
| ア、 個人の場合 | 個人会員 | 五千元以上 |
| | 特別個人会員 | 十万元以上 |
| イ、 法人の場合 | 法人(団体)会員 | 十万元以上 |
| | 特別法人(団体)会員 | 百万元以上 |

三、 賛助会員の特典

ア、 特別会員(個人・法人)

- 1 年一回以上公演全の切符御一名様御招待
- 2 「財団の宴」など種々の行事に御招待

イ、 会員(個人・法人)

- 1 年一回以上公演全の切符御一名様御招待

なお、御入会くださいます方は、賛助会員会費寄付申込書に御記入の上、御返送いただきたく存じます。賛助会員会費寄付申込書は、当財団宛てに、御請求くださいませ。領収書は、銀行にお振り込み下さいました後、お送り申し上げます。

【平成30年度 賛助会員(五十順敬称略)】

石上春江 奥山章雄 加戸守行 楠 定憲 沢田祐二 諏訪春雄 田中英機

民族舞踊文化 No.31 令和元年(2019)5月9日発行 発行人 加戸守行 編集 黛民族舞踊文化財団事務局
〒107-0052 東京都港区赤坂3丁目10番3号 黛ビル4階 MAYUZUMI BLD 4F,3-10-3,AKASAKA,MINATOKU,TOKYO
一般財団法人 黛民族舞踊文化財団 THE MAYUZUMI FOUNDATION FOR TRADITIONAL FOLK DANCE
TEL 03-3583-3633 FAX 03-35833639 ホームページ <http://www.mayuzumi.or.jp>